

平成17年12月10日発行

発行：学校法人皇學館
編集：法人本部総務課

TEL0596・22・6308

E-mail: soumu@kogakkan-u.ac.jp

皇學館学園報

第6号

■伊勢学舎

【法人本部・大学院・専攻科・文学部】
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201(代) FAX0596・27・1704

■名張学舎

【大学院・社会福祉学部】
〒518-0498 三重県名張市春日丘7番町1番地
TEL0595・61・3351(代) FAX0595・61・3350

●インターネットホームページ

<http://www.kogakkan-u.ac.jp>



肅々と執り行われた祭典。本澤雅史助教授が斎主を務め、伴五十嗣郎学長をはじめ高林正明実行委員長らが参列した。

盛大な祭祀としての大学祭

倉陵祭 ◆伊勢学舎

祭典で思いを一つに

雲ひとつない好天に恵まれた倉陵祭の初日、伊勢学舎では正午より記念講堂にて祭典が執り行われ、厳かな開幕となった。

四十四回目を迎える今年のテーマは「粋」。はからずも、神宮皇學館時代に学生たちがつくった歌の中で「意気卓犖（いきたろうく）」(抜き)

ん出て優れていること」という文言が使われていることから、祝詞にもその言葉がよみ込まれ、期間中の成功と無事を祈って奏上された。

倉陵祭史上、女性では二人目の祭典局長となった



「貴重な体験でした」と古賀さん。約半年前から準備に取り掛かっていたそう。

た古賀絵里香さん(神道学科)は「降神の儀では思わず涙が出そうになって……」と、責任の重さを感じながらも滞りなく奉仕を

終えホッとした様子。古賀さんの発案で、参列者には昔講堂に掲げられていた額「稽古照今」を染めた手拭が配られた。祝辞にあたって、伴五十嗣郎学長は「本学の大学祭は単なる催し事では



秋空のもと名張学舎においては十月二十二日・二十三日の両日にわたって第八回「皇名祭」が、伊勢学舎においては同月二十八日から三日間の日程で、第四十四回「倉陵祭」がにぎやかに行われた。今では地域にもすっかり定着したこれら伝統の大学祭を、初めて迎えた一回生や最後の記念に参加した四回生など、学生はそれぞれの思いを胸に楽しんだ。

地元市民との触れ合い楽しく

皇名祭 ◆名張学舎

個性光るイベントがめじろおし

名張学舎では第八回皇名祭が十月二十二日、二十三日の両日にわたって開催された。第一回の大学祭から受け継がれてきた《なバリ愛フリー》というコンセプトのもと、



「浦安の舞」の奉納。

今回のテーマは「夢現」。みんなで無限のパワーを出し合って、夢が現実となる皇名祭にしようとの思いから決まった。初日は雨によって祭典会場が大会議室に変更されたものの、十時半過ぎには雨が上がり、各模擬店が屋外通路沿いにずらり。また、福祉を学ぶ大学らしく、「点字広め隊」や「介護食体験」などの企画展やイベントも多数行

われた。その一つ「福祉具&高齢者疑似体験」部署では熱心に展示品を眺める一般客の姿も。友だちと来たという会員の女性も「自由に身動きとれないことがこんなに大変なんだ」と高齢者の苦



専用の装備で高齢者の疑似体験。

労を実感。在宅介護をしているという近所の主婦は、手首が曲がりにくい人のために作られたスプーンや簡単にペットボトルを開ける器具を手にとり、興味深そうにしていた。

地元の一般市民が大勢訪れるのも、皇名祭の大きな特徴の一つだ。今年で三回目と話す家族連れは、環境を考えたチャリティーバザー「エコチャリ」を目当てにやって来ているとか。「今日は着いたのが遅かったの、いい品はほとんど売れてしまった」とちょっぴり残念そうな表情だ

った。息子が在籍しているという夫婦は、模擬店で一生懸命働いている姿を見て、成長を感じ嬉しかったとのこと。構内では学生に混じって、小学生や家族連れ、カップルなど若者男女が楽しそうに歩いており、皇名祭が地域の人々との交流の場になっていることがうかがえた。



各クラブの個性あふれる屋台が並び、会場は盛り上がった。

地域では名物学祭として定着

樽神輿コンは国文四年が優勝

なく、天照大御神様をお迎えての厳肅な祭典にはじまり、三日間の行事が全体として一つの盛大な祭礼、お祭りなのであります」と挨拶。続いて

今年の倉陵祭の実行委員長を務めた高林正明さん(コミュニケーション学科)が「粋」という言葉をテーマに掲げた理由を語り、締めくくった。

初日のメインイベントとなる樽神輿は午後二時半過ぎにスタート。十五台の神輿とともに、約四百人が御幸道路を通る外宮までの往復約五キロを元気よく巡行し、沿道の人やドライバーの目を楽しませた。

恒例の樽神輿コンテストでは、牛車をモチーフにした国文学科四回生の「源氏物語」がみごと優勝。



校門を出て外宮へと向かう樽神輿の行列。

人、黒肥地真由さんは「最高の思い出になった」と興奮冷めやらぬ様子。パフォーマンスで使われた十二単などの衣装を前日まで徹夜で作ったという苦労話もどこ吹く風とばかりに、喜びを満面の笑顔で語ってくれた。



広場にてパフォーマンスが行われた。

幻想的な後夜祭で無事に閉幕

期間中は、各クラブの模擬店のほかに学生ライブや卒業記念ミュージカル、「ヤンキー母校に帰る」のモデルとなった義家弘介氏を招いての講演会など、多彩なイベントが繰り広げられた。



優勝作品の牛車もたいまつに。

後夜祭では樽神輿をたいてまづに投げ入れる恒例の神事も。ほぼ一カ月、朝早くから時には日付が替わってまで一生懸命作ってきた樽神輿の燃える火を囲み、感動のフィナーレとなった。

文学部・社会福祉学部合同による神嘗祭神宮参拝 厳かに四百五十名が参拝

平成十七年十月十七日
(月)、本学文学部・社会福祉学部合同による神嘗祭神宮参拝が行われた。

参加したのは教職員・学生ら約四百五十名。午前十時三十分、内宮宇治橋前に集合すると、一行は傘を手に正殿へ。伴五十嗣郎学長の御垣内参拝にあわせ、一同拝礼を行った。別宮荒祭宮においては、雨天のため学長に代わって一同が遙拝所において拝礼し、厳肅の内

に予定の参拝が執り行われた。

参拝後、文学部は教職員・学生とも大学に戻り、記念講堂にて開催の安江和宣教授(神道学科)による記念講話を聴講した。

講話では、神嘗祭は六月、十二月に行われる月次祭とともに、三節祭(三

次祭)と称されていること、また、その年の新穀を大御神に奉り、神徳に報

謝申し上げ、皇室のご安泰と弥栄を祈念し、国家



有意義に終了した講話会。



林崎文庫にて話を聞く学生たち。

の平安を祈る祭りであることなどが説明された。続いて、春分の御園祭にはじまり、四月上旬の神田下種祭から十月五日の御塩殿祭までの七回にわ



厳肅な雰囲気の中、拍手を打つ参加者一同。別宮荒祭宮にて。

平成十七年九月二十八日(水)、鳥羽国際ホテルにおいて、恒例の神社関係者招待会が開催された。この招待会は、神宮における大麻頒布始祭に参列されるために来勢された神社関係者を皇學館大学としてもお招きして、平素から多大のご支援、ご指導を頂いていることへの感謝を捧げ、今後変わらぬご親交をいただくための交流会である。

当日は神社本庁役員および関係の方々、神宮からは少宮司をはじめ関係者、さらに各都道府県神

社庁長の方々など九十二名にご参加いただき、本学からは理事長、学長をはじめ学内関係者十八名が出席して開催された。上杉理事長からご参会の方々には謝辞と特に現在進行している創立百三十周年、再興五十周年の記念事業について、神社界から格別のご支援と多額



会場は終始和やかな雰囲気となった。

百十名が集い盛大に開催 神社関係者招待会

の協賛を頂いていることに深い感謝とお礼が述べられ、総合体育館建築の現況と学園運営の状況が報告され、今後も継続してご協力とご指導をお願いする旨の挨拶があった。学長からも同様の謝辞とともに大学運営の現況、とくに本年度入学者数も例年と変わりなく定員を適正に超過していること、さらに来年度入学生志願者の確保にも努力していることに加えて、志願者ご推薦のお願いがあった。また、卒業生の就職についても、ほとんど総てが就職を実現し、今

学位請求論文は『祭祀の言語の研究』。主査は島原泰雄本学教授、副査は清水潔本学教授、毛利正守大阪市立大学教授。本論文は上代語を中心とする、祭祀に関わる言語についての研究である。内容は、表記「祝詞古写本間の仮名の異同」「正訓字表記と仮名の異同」。

白江恒夫氏

白江氏に博士号(文学)授与

副論文として付された『延喜式祝詞語注』は九条家旧蔵の延喜式祝詞を底本とし、卜部兼永書写本と卜部兼石書写本の祝詞を校合し、本文校異・訓読文を作成した上で主要語句に語注を施したものであるが、その成果は主論文に十分反映している。白江氏は昭和四十七年本学国文学科卒業、同五十四年同大学院文学研究科国文学専攻博士課程を満期退学。現在芦屋大学教育学部教授。又、天神社宮司。

れ、参加者は神嘗祭の意義について改めて認識し、熱心に耳を傾けていた。

社会福祉学部では、明治十五年に皇學館が設置された皇學館大学発祥の地である「林崎文庫」を訪れ、神宮文化部の職員の方から、その沿革について詳しく説明をいただいた。学生たちは、林崎文庫の講堂や本居宣長の「林崎文庫碑」などを見学しながら、本学に脈々とつながる伝統と歴史の深さに感じ入ったよう

中国との学術交流が活発 中国から客員研究員が来日

中国社会科学
院 河南 大学

中国から客員研究員が来日

本学との学術交流協定に基づく客員研究員が来日し、今後三月から一年間本学に滞在する。今回来日したのは中国社会科学の崔世広氏、河南大学の苗書梅氏・邱璐氏で、現職・研究テーマ・滞在期間は次のとおり。



崔世広氏

中国社会科学院日本研究所教授兼大学院日本研究科副主任▽神道と日本文化▽平成十七年十月八日〜平成十八年一月七日



苗書梅氏

河南大学歴史文化学院副院長▽日本学者の「中国古代郷村における権力が及ぼす問題」についての研究成果」に関する検討▽平成十七年十月一日〜平成十八年九月三十日



邱璐氏

河南大学日本語学部講師▽日本語教育充実に係る研究▽平成十七年十月

留学生 インタビュー

一日〜平成十八年九月三十日

本学では中国人留学生も積極的に受け入れている。今回は平成十七年十月に来日したばかりの張麗花さん(文学部研究生)にお話を伺った。

日本に留学したきっかけを教えてください。

◇高校のとき、日本語のクラスを選択したのがきっかけで、日本にとても興味を持ったんです。将来、大学で日本語や日本

の文化を教える先生にならなくて、留学を決めました。

で昔使われていたものなので、初めて知る漢字が多いです。

皇學館大学を選んだ理由は、

◇中国で学んでいた学校の先生が紹介してくださいました。とてもいい環境ですよ、とのこと。

実際に来ていかがですか。

◇私のふるさは中国の東北部にある延辺というまちで、高層ビルや建物が並んでいるんです。こちらは山や緑が多くとても静かなので、気に入っています。

◇みなさん親切ですね。道を聞くと、誰もがいねいに教えてくれます。中国の学生と日本の学生は違いますか。

◇中国人だから何々、日本人だから何々といった先入観はないですね。国籍は関係なく、人それぞれではないでしょうか。

学校生活で驚いたことはありますか。

◇学祭を見て驚きました。中国ではこうしたイベントは行われません。期間中はお抹茶をいただいたりして、とても楽しかったです。

◇夢である大学の先生になるためにも、しっかりと勉強をがんばって博士号を取得したいと思っています。

漢字は中国発祥ですからなじみ深いのは。◇中国漢字と日本漢字は似通っているようで、意味、形ともずいぶん違います。現代中国語では多くの漢字が簡略化されていますから、日本で今使われている漢字は、中国

神社界	
宮城県	愛知県
百五十万円	百万円 愛知縣護國神社様
(宮沼市稲荷町)	(中区三の丸)
山形県	京都府
五十万円	二千五百万円
湯殿山神社様	伏見稲荷大社様
(山形市旅籠町)	(伏見区深草敷之内町)
埼玉県	大阪府
十五万円	二十万円
川口神社様	鶴見神社様
(川口市金山町)	(鶴見区鶴見)
東京都	兵庫県
三百万円	五十万円
湯島天満宮様	生石神社様
(文京区湯島)	(高砂市阿弥陀町)
二百万円	志方八幡宮様
(新宿区西早稲田)	(加古川市志方町)
富山県	兵庫縣神戸護国神社様
十万円	(灘区篠原北町)
雄山神社様	兵庫縣姫路護國神社様
(中新川郡立山町)	(姫路市本町)
長野県	和歌山県
二百万円	三十万円
諏訪大社様	紀州東照宮様
(諏訪郡下諏訪町)	(和歌山市和歌浦)
岐阜県	岡山県
百万円	五十万円
南宮大社様	鴻八幡宮様
(不破郡垂井町)	(倉敷市児島下の町)
八王子神社様	
(惠那市明智町)	

記念事業 寄付者芳名 ⑤	
十万円	阿智神社様 (倉敷市本町)
二十万円	速谷神社様 (廿日市市上平良)
長崎県	
十万円	富松神社様 (大村市三城町)
	八幡神社様 (大村市松原本町)
	淵神社様 (長崎市淵町)
六万円	白沙八幡神社様 (苓崎市石田町)
五万円	橘神社様 (南高来郡千々石町)
三万円	小浜神社様 (南高来郡小浜町)
二万円	天満神社様 (苓崎市石田町)
	八幡神社様 (苓崎市石田町)
	八幡神社様 (南高来郡南串山町)
	六社神社様 (北松浦郡小値賀町)
	國本神社様 (対馬市上県町)
	阿蘇神社様 (諫早市多良見町)
一万円	伊都岐島神社様 (長崎市東雲平町)
	宇久島神社様 (北松浦郡宇久町)
	羽黒神社様 (松浦市星鹿町)
	榎津神社様 (南松浦郡新上五島町)
	乙宮神社様 (南松浦郡新上五島町)
	乙宮神社様 (対馬市厳原町)
	温泉熊野神社様 (島原市杉山町)
	温泉神社様 (南高来郡有明町)
	温泉神社様 (南高来郡国見町)
	温泉神社様 (南高来郡国見町)
	温泉神社様 (南高来郡吉妻町)
	温泉神社様 (南高来郡小浜町)
	温泉神社様 (南高来郡加津佐町)
	温泉神社様 (南高来郡千々石町)
	温泉神社様 (島原市亀の甲町)
	海神神社様 (対馬市豊玉町)
	厳立神社様 (長崎市くらりの里)
	亀岡神社様 (平戸市岩の上町)
	熊野神社様 (西彼杵郡時津町)
	熊野神社様 (南高来郡布津町)
	戸町神社様 (長崎市戸町)
	五社神社様 (五島市上天津町)
	高城神社様 (諫早市高城町)
	今山神社様 (北松浦郡福島町)
	三輪神社様 (平戸市組差町)
	山口神社様 (佐世保市世知原町)
	志々伎神社様 (平戸市志々伎町)
	志自岐羽黒神社様 (南松浦郡新上五島町)
	七獄神社様 (五島市玉之浦町)
	若宮神社様 (南高来郡西有家町)
	春日神社様 (佐世保市吉井町)
	小串神社様 (南松浦郡新上五島町)
	松島神社様 (西海市大瀬戸町)
	松尾神社様 (西彼杵郡時津町)
	諏訪神社様 (南高来郡深江町)
	諏訪神社様 (長崎市向町)
	須佐神社様 (佐世保市高梨町)
	政彦神社様 (南松浦郡新上五島町)
	青方神社様 (南松浦郡新上五島町)

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、氏名・金額等の掲載を希望されない方々につきましては、別記とさせていただきます。

■神社界／三社 ■館友／三名

■誓の会／百二十名

[illegible]

三万円	文学部神道学科	三万円	松永	寿人様
三万円		三万円	真取	正典様
六万円		六万円	鈴木	光章様
五万円		五万円	嶋田	千秋様
四万円		四万円	嶋田	崇晶様
三万円		三万円	曾我	哲洋様
			嶋田	哲弘様
			松田	良治様
			秋鹿	成文様
			相田	成文様
			荒谷	信保様
			石垣	利信様
			石川	光磨様
			石橋	正雅様
			伊藤	晴康様
			確井	勝康様
			内田	嘉彰様
			岡本	宗道様
			岡本	光浩様
			小野	雄一様
			小野	日隆様
			加茂	嘉胤様
			河野	宗清様
			北川	行嗣様
			倉本	俊喜様
			坂本	直明様
			櫻井	令子様
			佐古	利幸様
			佐師	正明様
			志賀	広津様
			重村	津恵様
			清水	孝則様
			須田	郁子様
			曾我	保文様
			宝田	憲明様
			竹内	幸弘様
			武田	俊博様
			竹原	安弘様
			武政	年広様
			野中	要佐様
			野々山	幹夫様
			野水	整様
			橋本	國房様
			藤田	泰臣様
			藤津	己子様
			船原	千廣様
			前田	誠二様
			丸尾	一芳様
			溝脇	操様
			向井	哲様
			村岡	一比古様
			茂木	一茂様
			元橋	茂様
			守田	義久様
			八尋	義久様
			山崎	佳久様
			山下	隆義様
			横森	眞二様
			吉見	寿夫様
			吉本	邦夫様

〃 〃																																
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

[illegible][illegible]

江戸時代のお伊勢参りを追体験

約110kmを完歩！平成お蔭参り「伊勢まで歩講」

伊勢まで歩講の行程表

全距離 約110km

28日

桑名七里渡し跡

8時発

約20km

16時着

大宮神明社

《四日市市日永町》

29日

大宮神明社

8時発

約40km

18時着

結城神社

《津市八幡町》

30日

結城神社

8時発

約20km

16時着

神戸神社

《松阪市垣鼻町》

31日

神戸神社

8時発

約30km

18時着

外宮・市役所・

内宮・大学

- 桑名七里渡し～日永追分 (20.2km) ……東海道
- 日永追分～内宮 (82.5km) ……伊勢街道



古来から桑名の地主神として崇敬されている春日神社。青銅の鳥居について岡田教授の詳しい解説を聞く。

学園ニュース

道ゆく人々との
触れ合い楽しく

「伊勢に行きたい伊勢路が見たい、せめて一生に一度でも」と謳われるほど全国の民衆を熱狂の渦に巻き込んだお蔭参りが宝暦二年（一七〇五）に起こってから今年で三百年。本学では十月二十八日から四日間かけて、桑名の七里の渡跡から内宮まで約百十キロの参宮街道を歩く「伊勢まで歩講」を主催。岡田登・史料編纂所教授をはじめ学生や一般参加者十余名が参道沿いの人びとと触れ合いながら無事お伊勢参りを果たした。

お蔭参り三百年を迎えた本年は、伊勢神宮の遷宮諸祭が始まり、お蔭参りの伊勢市も市町村合併によって新市に生まれ変わる節目の年に当る。そんな中、参宮街道を歩いてお伊勢参りすることによって、往時の人びとが味わった「達成感」「充実感」を追体験しようというものだ。

参宮街道沿いには往時の常夜燈や旅籠など多くの史跡が今も残る。一行は、岡田教授の案内で参宮の歴史を学びながら歩いた。また、街道沿いの人びととできるだけ触れ合えるようにと、道ゆく人びとに「伊勢まで歩講」の趣旨を記したチラシや徹銭代りの絲印煎餅などを配って歩いた。

初日は好天だったが、二日目の午前は雨が降り、鈴鹿市内ではずぶ濡れになりながら歩いた。見なれぬ白装束姿に驚いて避ける人もいる一方、にっこりと微笑んで声をかけたり、拍手をして励ましてくれる人もいた。

大変な思いをしたからこそ、ありがたさを実感

道中の宿泊先はいずれも神社を利用。夜はみんなでも何でも話し合い、十代から七十代まで世代を超えて仲間意識が生まれたという。

最終日、一行はみな元気な姿で伊勢の内宮に到着。中には足を引く学生もいたが、表情は晴れ晴れとしていて、四日間歩き通した充実感が漂っていた。

最年長の七十一歳で参加した桑名市の高木敬一郎さんは「松阪に入る手前で、町の人たちが並ん



およそ110kmの道のりを完歩し、充実した面持ちで宇治橋を渡る参加者たち。

で拍手をしてくれたことが一番うれしかったです。百十キロ歩けたこともすごく自信になりました。来年以降も続けてほしいです」と疲れを見せない笑顔で語った。神宮では言葉で表せないほど清々しい気持ちになったという土井祐介さんは、神職を目指す聴講生。お伊勢参りをする人たちの気持ちに少しでもわかれたいと思い、参加しました。桑名からでもすごく遠いのに、当時はさらに遠い国々から歩いて来られたわけですから、神宮がいかに人びとの信仰を集めていたのかを感じました。

岡田教授も到着後、ほとととした表情を交えながら「江戸時代の人は、大変な苦勞をして伊勢に来たのだと実感しました。遊びのためでなくお伊勢

体験コラム

「伊勢まで歩講」に参加して

国史学科一年 谷戸 佑紀

去る十月二十八日から三十一日までの四日間、かつての参宮街道を歩く「平成お蔭参り・伊勢まで歩講」が催されました。今年がお蔭参り三百年「お蔭年」にあたることを記念して旧街道沿いの方々に歴史と親しんでいただき、自らも参宮によって得られる達成感を感じたいというものです。

参加させていたからこそ道歩きながら参宮街道を歩いたこと、参加者一人ひとりの心の中に大きな糧を残した。お伊勢参りの背景を考えると、意義のある体験となった。



桑名の七里渡し跡を元気良く出発。

分がさまざまな方に支えていただいているということに改めて気づかされたように思います。学習面においても、岡田先生が史跡を説明しながら歩いてくださいましたので、多くの史跡を見ることができましたし、とてもよい勉強になりました。特に、街道に点在する常夜燈は当時の人々の「信仰」と「公への精神」をうかがわせるものとして私の心に強く残っています。そして、私たちの身の周りには、かつての人々の思いが無数に息づいているのだと感じました。

参宮の大変さに驚き、人とのふれあいに驚き、自分の未熟さに驚き……。神宮への道は、驚かされること、興味深いことばかりでした。参加させていただき本当に良かったです。

後日の話ですが、小さな発見がありましたので紹介します。桑名の鍛冶屋町を歩いていますと、廣房刃物店というお店があり、表札には「三品某」とありました。「もしや」と思い、調べてみると、江戸時代後期、桑名で作刀していた三品廣房という刀工の子孫の方が経営するお店であることがわかりました。ただこれだけのことで、当時のおもかげを見つけたようで、とても嬉しい発見でした。昔とは変わってしまっただよに見えていても、変わらないもの、受け継がれたものがある。これが今回のおかけ参りで学んだ一番のことです。

最後となりましたが、この貴重な体験をさせていただきますいました皆様、本当にありがとうございました。

皇學館創立のルーツを探る

創立百三十年
再興五十周年の
光輝

皇學館大学の前身が、明治十五年、神宮林崎文庫に創設された神宮の教育機関「神宮皇學館」であることはよく知られている。しかし、その萌芽はすでに

江戸初期にあった、と本学史料編纂所の岡田登教授はみる。

「皇學館が生まれた前提として、慶安元年（一六四八）に建てられた豊宮崎文庫の存在が大きいと思います」。

豊宮崎文庫は、外宮の権禰宣で御師、国学者でもあった出口延佳の首唱により山田に開かれた学問所だ。神職を始めとする御師達の教育施設であり、また図書館の先駆けともいえ、当時としては画期的な存在であった。

「伊勢信仰の仲介役を務めた御師は、全国から公家や大名などあらゆる階層の人々を迎えました。神様の客である参宮客に最上のおもてなしをするため、御師達は一流の学問や教養を身につけ、切磋琢磨する必要があったのです」。

貞享三年（一六八六）には宇治に内宮文庫が設立されたが（四十年後に移転し林崎文庫と改称）、明治四年に世襲神職や御師職の廃止が決定。その後、それぞれの蔵書類は神宮文庫に引き継がれた。

皇學館は明治十五年に突如誕生したのではなく、日本古来の学問を学び、伝え、受け継ぐ風がすでに伊勢の地に育っていた。



静かにたたずむ旧林崎文庫。本居宣長や大塩平八郎など多くの学者が集った。



門と築地塙を残すのみとなった旧豊宮崎文庫。